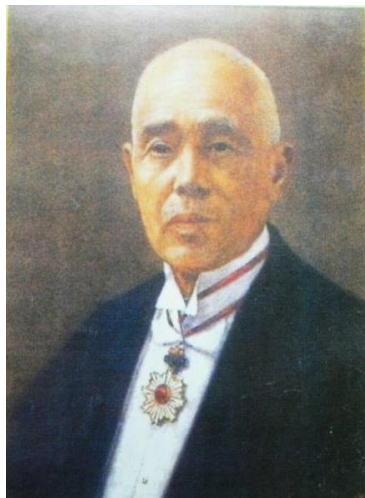


③代議士根本正翁

那珂市歴史民俗資料館



根本正は嘉永4年(1851)那珂市東木倉に誕生し、昭和8年(1933)に83歳で亡くなりました。水戸藩彰考館総裁豊田天功・小太郎父子に学ぶ中、パリ万博の土産品「時計」と「マッチ」を見て驚嘆、高度な文明を産み出した英語圏の国々に学ぼうと決意して上京。キリスト教との出会いもあって、それまでとは違った自由・平等の考え方と博愛の精神に触れ、苦学の末に遂に渡米します。アメリカでは、義務教育が無償で広く行き渡り、貧しくとも実力と努力があれば成功することや開かれた議会政治の大切さなどを実感しました。

帰国後、はじめは政務調査員としてメキシコ・中央アメリカ・ブラジル・インドなどに海外移民調査や商工視察をするなどして、「ブラジル移民の父」ともたたえられています。明治31年(1898)、3度目の挑戦で衆議院議員に当選(48歳)、以後大正13年(1922)までの13回の選挙に一人の違反者も出すことなく公明選挙・清貧な政治家を貫きました。この間、小学校教育の授業料を廃止して無償とする法律や未成年の喫煙・飲酒を禁ずる法律の制定にも尽力しました。国家の将来を担う子どもたちの学習を保障し、健全な成長を期待したいとの信念でした。

そのほか水郡線敷設、横利根閘門建設、東海村村松海岸の防砂林植栽事業の推進、九十九里浜沖の暴風雪による遭難事故をきっかけとした高層気象観測所の設置など多方面に尽力しました。これらはすべて、国家・国民への「愛情」から生まれたものでしたが、自らは「微光(かすかな光)」に過ぎないと謙虚に語っています。この粘り強い根本正の生涯は、正自身が好んだ古歌「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそ待て」によく表れています。

社会全体はもちろん教育界にも混迷が見られ、青少年の健全育成、国民・国家のあり方が問われる現在、根本正の生き方・功績が注目されています。翁自筆の「微光」が刻された顕彰碑は平成13年(2001)、生誕150周年を記念して顕彰会によって那珂市役所前ノ関親水公園畔に建てられました。(肖像写真は根本正顕彰会刊行『根本正伝』より。古歌軸は館所蔵)

